

# 論 文 要 旨

病的なギャンブル行動の生起に影響を及ぼす  
ギャンブルに関する認知の実証的検討

平成 26 年度  
北海道医療大学大学院心理科学研究科  
臨床心理学専攻

横 光 健 吾

## 1. 本論文のまとめ

第1章では、病的ギャンブル (pathological gambling: 以下, PG) は、さまざまな問題を引き起こす精神疾患であり、PG の有病率が約1%であることや、病的ギャンブラーの家族や周囲の人間が PG に関連するさまざまな問題に直面していることから、多くの人々が PG によって生活に支障をきたしていることが示されている。また、現時点で PG に対して効果的な治療は認知行動療法と薬物療法であることが明らかにされているが、治療終了後における再ギャンブル予防を視野に入れた治療を実施することが PG の治療において重要であることから、認知行動療法が PG の治療として推奨されている。

第2章では、従来の PG に対する認知行動療法に関する研究についてシステマティックレビューを行った (研究1, 研究2)。その結果、今後の PG に対する認知行動療法における解決すべき課題として、サンプルサイズの大きな、潜在するバイアスの少ない無作為化比較試験の実施と、PG 治療におけるアウトカム変数や媒介変数として重要な心理学的要因の特定、を明らかにした。

第3章では、PG 治療における重要な心理学的要因の特定を試みるなかで、生態学的要因・主観的興奮・ギャンブルに関する認知の3つの要因が、ギャンブル行動の生起に関して重要な要因であることが示されたが、ギャンブル行動や PG 症状との関連がこれまでに報告されているものは、ギャンブルに関する認知のみであることがわかった。そして、従来の PG に対する認知行動療法において、ギャンブルに関する認知がどのように取り扱われてきたかをまとめるなかで、ギャンブルに関する認知の研究には、①ギャンブルに関する認知の変化を治療セッション時 (「セッション時やホームワーク時に、クライアントがどのように合理的にギャンブルについて考えることができるようになったかに関する変化」) と治療セッション外 (「特定の尺度によって測定される、クライアントのギャンブルに関する認知がどの程度合理的になっているかに関する変化」) の双方において検討した認知行動療法の実践に関する研究が必要であること、②わが国ではギャンブルに関する認知を測定することのできる尺度が開発されていないこと、が明らかとなった。

そこで、第3章までに指摘された問題点を解決するために、まずギャンブルに関連する認知を測定できる信頼性と妥当性が認められた尺度 (Gambling Related Cognitions Scale 日本語版: 以下, GRCS 日本語版) を開発し、ギャンブルに関連する認知の潜在構造の特徴を明らかにすることが必要である。そして、PG に対する認知行動療法を実施し、治療セッション時の参加者の発言内容と GRCS 日本語版によって測定されるギャンブルに関する認知の変化がギャンブル行動の減少にどのような影響を及ぼすかを明らかにすることが必要である。

第4章では、ギャンブルに関連する認知を測定することのできる Gambling Related Cognitions Scale (Raylu & Oei, 2004) の日本語版を開発した (研究3)。その結果、ギャンブルに関連する認知を測定することのできる測定指標が開発され、わが国におけるギャンブルに関連する認知を取り扱う研究の促進、及び治療効果研究における治療前後での

ギャンブルに関連する認知の変化の測定が可能となった。

また、ギャンブルに関する認知の潜在構造を検討するため、タクソメトリックアナリシスを用いてギャンブルに関連する認知の潜在構造の検討を行った(研究4)。その結果、ギャンブルに関連する認知の潜在構造は次元性質を有することが明らかとなり、ギャンブルに関連する認知は、重症度の低いギャンブラーや一般成人においても示される症状であり、病的ギャンブラーとそうでない者とを二分する境界のないことが示唆された。

第5章では、過度のギャンブル行動を主訴とする4名の成人男性に対して集団認知行動療法を実施し、参加者のギャンブル行動、及び治療セッション時の参加者の発言内容(「セッション時やホームワーク時に、クライアントがどのように合理的にギャンブルについて考えることができるようになったかに関する変化」とGRCS日本語版(「特定の尺度によって測定される、クライアントのギャンブルに関する認知がどの程度合理的になっているかに関する変化」)によって測定されるギャンブルに関する認知が、治療プログラムを通してギャンブル行動の減少にどのような影響を及ぼすかを検討した(研究5)。その結果、本治療プログラムに参加したことによって、4名のうち3名にギャンブル行動の減少、及びGRCS日本語版の得点の減少が認められた。また、3名にセッション中の非合理的な発言の減少が認められ、4名全員にセッション中の柔軟性のある発言の増加が認められた。また、動機づけの高さや抑うつ症状が、ギャンブルに関する認知とギャンブル行動の間に影響を及ぼしている可能性が示唆された。

## 2. 本論文の意義と今後の課題

本論文において、ギャンブル行動の生起メカニズムに関する認知行動モデル、及びこのモデルに関連する心理的要因の先行研究を概観するなかで、ギャンブル行動やPG症状との関連がこれまでに報告されている心理的要因は、ギャンブルに関する認知のみであり、PGの治療においてギャンブルに関する認知を治療の中核として扱うことが重要であることが示された。つまり、PGに対する認知行動療法を行ううえで、治療者が媒介変数やアウトカム変数としてギャンブルに関する認知を測定し、その変化を検討することの重要性が示されたことは、本論文の有益な点である。また、わが国において使用可能なギャンブルに関する認知を測定することのできる尺度を開発できたことは、わが国におけるPGに関する基礎研究や治療効果研究の促進につながる点で非常に有益である。第5章では、認知行動療法を実施することによって、2つの形態で測定されたギャンブルに関する認知のどちらにおいても、その改善が認められた。しかしながら、ギャンブルに関する認知の改善につながった治療要素を特定することは、現段階で困難であった。今後の課題として、どのような治療要素が、ギャンブル行動やギャンブルに関する認知の改善に有効であるかに関する実証的な研究、及びギャンブルに関する認知を含めたギャンブル行動の生起メカニズムに関するさらなる実証的な検討を実施する必要性を示唆することができた本論文は、PGに対する研究の今後の方向性を示す重要な知見であると言える。